

第238回

「元気に百歳」クラブ・俳句サロン「道草」(令7年1月) 句会記録

暖かい日も数日あるかと思えば、身体に突き刺さってくるような寒さに襲われる日もあります。雨は少ないですが、降るときはしっかりと降ってくれます。北日本の降雪量は、テレビで見る限り厳しいものがあり、多くを語る必要はありません。被害を最小限に食い止めていただきたいですね。

とはいえ「光陰矢の如し」とは、このこと。時の過ぎる速さは、こんなものです。「阪神大震災30周年の式典」も本日早朝に終了、式典の様子、神戸市民の30年の思いなどなど拝聴しておりました。「道草」句会は、1月10日に終了、今月は「季語」についての疑念が多く、今日の句会記録では、藤田湘子の著作を参考に、有用と思われるところを抜粋しました。以後のご参考になれば嬉しいです。

1月の投句に参加された方(15名)

芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、金田月草さん、坂上まさあきさん、高瀬荻女さん、辻 柴楽さん、手嶋錦流さん、原 晶如さん、船戸清助さん、本間傘吉さん、森田多佳さん、芦尾白然。

句会に参加された方々(7名)

創風さん、和感さん、荻女さん、晶如さん、傘吉さん、多佳さん、白然。

本日の優秀句並びに獲得票数

今月、皆さんに優秀句として選句され、天賞に推挙された句、投票の多かった最多得票賞(☆印)の句は、下述の通りです(欠席された10名の方の選句は、奥田さんが代読披露して下さいます)が、優秀句の4句を分析致します。

◎『歌留多よむ亡父のほのかに京訛り』	月草	天2☆6
◎『陽だまりを追ひつつ老いぬ冬の蝶』	坂上まさあき	天2㊦4
◎『初詣己ともかく孫のこと』	創風	天2㊦3
◎『ガスの火の機嫌取りつつ餅を焼く』	歌多音	天1☆6
◎『柱には振り子時計と新暦』	晶如	天1㊦4
◎『能登地震里山の春まだ遠し』	蒼樹	天1㊦4
◎『年越しの疲れ溶けゆく露天風呂』	柴楽	天1㊦3
◎『病みし人見守る窓に初日の出』	歌多音	天1㊦3
◎『人波にスマホかざせる初詣』	荻女	天1㊦3
◎『正月の飾りを首に犬二匹』	多佳	天1㊦3
◎『曉闇の風音の刺さる年初め』	清助	天1㊦1
◎『逝く友とグラスをささげ除夜の鐘』	柴楽	天1㊦1
◎『羽子の音路地に昭和の名残かな』	傘吉	☆7
◎『年新た青また青の円き空』	清助	☆6

最多天賞句は、天賞2票を含む、6票獲得の月草さんの句「歌留多よむ亡父のほのかに京訛り」が、高得票でしたが、句全体としては、中七の亡父という表現を除いては、現在を詠んでいる句体で、もう一工夫欲しいところでした。中七の「亡父のほのかに」の「の」は、字余りですが、これは解消できるのではないのでしょうか。

次に傘吉さんの句「羽子の音路地に昭和の名残かな」は、天賞票は無票でしたが、最多投票7票を獲得しました。句を十回ほど読めば、昭和時代の路地裏に見えてくる羽子突きの景が見えてきます。昭和の名残というか、懐かしいものがあります。

もう一つ、坂上まさあきさんの句「陽だまりを追ひつつ老いぬ冬の蝶」が、天賞2票を

獲得しました。季語「冬の蝶」が、まさにそうであるように、脆弱と短命を思わせ、うかうかと生きる人とを対比させる表現は、人の儚さを思わせます。心に刻み付けられる句ではないでしょうか。

「冬の蝶は」は歳時記を観ましても、勿論のこと、冬の季語ですが、例えば「冬の蝶」というように、「冬」と「蝶」があって、これは「冬が付いているから季語になる」というものではないと、季節がつけば、何でも「季語」になる訳ではないという意見が出ました。これは私たちの日頃の季語に対する軽さへのご指摘と思われます。自分の使う、或いは使った季語は、歳時記を調べ、季語かどうかの判定をする必要があるということ。これは守らなければなりません。

それではここからは、俳人藤田湘子の本から「季語」について書かれているところを抜粋してみましょう。

藤田湘子著「俳句作法入門」（角川選書 35頁～）、2006年12月、14版発行
「季語を信頼する」（文章は途中からです）

（～略）推薦句のうち、

」
朝礼の黒髪ばかり青あらし （古谷暁闇）
飛驒川は石を削りて鮎育つ （久米はじめ）
羽蟻とぶ琴立てかけし部屋の奥 （明石令子）

は、いずれも二物衝撃とか配合と言われるつくり方で、季語と五七または七五のフレーズから成っている。古谷氏の作で言えば、「青あらし」という季語と「朝礼の黒髪ばかり」というフレーズとがひびき合って、中学か高校か、まだ髪の新緑とした生徒たちの整列した群のイメージが、校庭を囲む緑の樹々や颯と吹く青嵐の爽快さと相まって、まことすがすがしい印象をもたらしているわけである。

久米、明石両氏の句も同様で、季語「鮎」「羽蟻」については、わずかに「育つ」「とぶ」と言っているだけで、余分な説明は一切していない。古谷氏の句を、仮に「朝礼の黒髪に吹く」とでもしたら、この一句がたちまちなよなよした趣になってくるのがわかるだろう。

一物仕立ての句は、季語または対象となるものに対する犀利な観察がなければならぬから、この方法で一句を成すには、かなり苦勞する筈である。たとえば、

まくなぎの吾が体温に触れ狂う （須能 賢）
＊記録者注（まくなぎ＝みずすまし）

というのは、完全な一物仕立てとも言えず、さりとて二物衝撃というほどでもないつくり方だけれど、「吾が体温に触れ」といった鋭い接点がある。まくなぎの狂いようを見事に暗示するはたらきがある。こういう鮮やかな一点があれば、一物であろうが二物であろうが、季語は季語としてよくはたらいてくれるのである。すなわち、まくなぎに対して「狂う」という説明的なことばが、逆にいきいきと効果を發揮してくるわけである。

ところが、

十葉の匂ふ石垣雨の坂
結界をす早く抜けし夏燕
新緑にも色の濃淡谷の風
つんつんと松の芯立ち口かろし

などの傍線の部分は、季語そのものの説明に終わっていて、その分だけ損をした詠い方

になっている。十葉は匂うもの、燕はすばやいもの、新緑はいろいろの緑があるし、松の芯はつんつんと立っているものである。また

朝の水汲めばまぶしき柿若葉

逆を見上げて眩し柿若葉

柿若葉まぶし赤子を抱きとめる

のように、柿若葉というと申し合わせたように「まぶし」と言う。「まぶし」と言わなくても、柿若葉と言えばまぶしさが連想されるのだから、これはわざわざ一句の中に持ち込む必要のないことばと言えるのだ。つまり無駄である。こうした無駄は、「青梅雨濡れて」「暈の梅雨の月」「燃えて赤きつつじ」「セルを軽しと」「空に泳ぎて鯉幟」といった具合に、枚挙に遑ないほど頻繁に使われている。これではせっかくの季語が泣いてしまう。

季語は、言うまでもなく大きな広い連想力を持った言葉である。そのことは俳人なら大抵知っているはずなのに、作句の場に立つとそれを忘れてしまう人が多い。私は、季語は季語としてそのままにしておいて、一切の説明をしないほうがいい。と言って指導している。季語は、そのほうがずっと連想力を広げてくれる。言葉を換えて言えば、季語の力に全幅の信頼を置くということである。（～略）

この後、本著書では「季語はそのまま」という小文が続くのですが、「季語は、いじればいじるほど、連想力を羽ばたかせることがなくなる」とあります。大事なところですから何度も言われていると思いますが、ここでは省略します。

（白然記）